

# 日銀事務所長の あさひかわ経済 あれこれ No.21

## 少しずつ増える人出 個人消費も持ち直しの動き

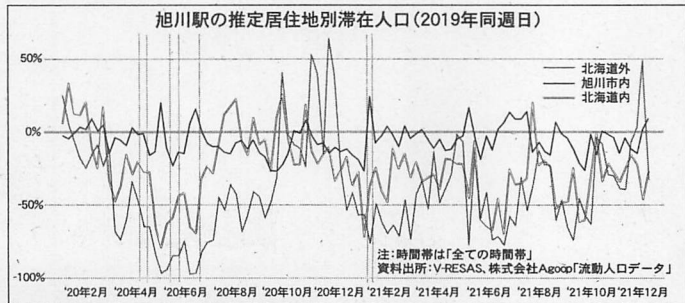
この年末年始は、旭川に着任以来初めて家族のいる静岡に帰省します。2回のワクチン接種と最近のコロナ感染状況の落ち着きが決め手となりました。家内とは電話でほぼ毎日話をしていいますが、対面で会うのは1年9カ月振りのことです。

旭川では、10月の緊急事態宣言の解除後、緩やかに人出が増えていきます。内閣府が専用サイトで公表する人流データを見ても、旭川駅の滞在人口は持ち直し傾向です。週によって振れはありますが、推定居住地が旭川市内と北海道外である滞在人口はコロナ前の水準

に戻りつつあります。自身、買物公園周辺を歩いていて、飲食店の前に人が集まる光景を何度か目にしました。昼夜を問わず、少しずつ人出が増えていく印象を受けます。

さらに、旭川市内のホテル稼働率が「あさびや」割「や」どうみん割の1割もあつて持ち直しています。旭山動物園の来園者数もコロナ前には及びませんが、はつきりと回復傾向にあります。

道北地域の個人消費にも、一部に持ち直しの動きが見られます。巣ごもり需要が続く中で食料品が底堅い動きを維持しているほか、衣料品も外出機会の増加を映じて、低



ツピングモールなど大規模店舗では、来店客数、売上ともに回復の動きが見られます。また、乗用車販売は、新車登録台数が部品不足によるメーカーの納車遅れから減少していますが、店頭での受注は堅調です。

こうした状況を踏まえて、日銀旭川事務所では、今月公表した金融経済概況において、個人消費と観光の判断を引き上げ、景気全体の基調判断もこれまでの「横這い」から「持ち直しの動きがみられている」へ上方修正しました。上方修正は、昨年9月以来、1年2カ月振りです。今後も持ち直しの動きが続いていくためには、感染状況が一定程度に落ち着き、感染抑制と経済活動の両立が図られることが前提

となります。

気になるのは感染力の強いオミクロン株の動向です。市中感染が始まると急速に感染拡大する可能性が指摘されており、不確実性が高く、下振れリスクが懸念される状況です。

来る2022年は寅年です。干支である壬寅(みずのえとら)は、「冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる」とのイメージを表すそうです。地元銀行2行の2022年度北海道経済の実質成長率見通しは個人消費の回復を軸に、+2.5〜+3.0%と今年度比べて幾分か高まるとの予想です。来

年こそは、コロナ禍を乗り越え、はっきりとした成長が実感できる年となるよう、心から願っています。



【大賀健司(おがけんじ)】一九六五年神奈川県生まれ、青山学院大学法学部卒業。業務企画役、青森支店次長、政策委員会企画役、静岡支店次長を経て二〇二〇年に旭川事務所長に就任。

(毎月第四週に掲載します)